



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 20

どもも大人に混じって松ヤニを採り、鉄くずなどの金属を集めた。

前線の兵士を勇気づけるため、手紙や絵を慰問袋に入れて戦地に送ったりもした。また、食糧不足も著しく、国民学校の運動場は一面芋畑で、私たちはその世話をしていた。

私の父は陸軍の召集命令に応じるまで、広島市が本社の藝陽自動車にハイヤーやバスの運転手として勤務して

いた。父が

「呉」近くに勤務して

いたとき、

私と母は、

国鉄呉線で

「呉」によ

く行っていた。「呉」に近づく

と、汽車の木製鎧戸を閉めるよう

命令された。当時、呉海軍工廠で

は戦艦大和を建造中で、工廠は高

い遮蔽壁で隠されていた。

2016年11月、劇場公開して

いたアニメ映画「この世界の片隅

に 昭和20年、広島・呉」は、私

の体験とびったり重なって懐かし

かった。戦艦「伊勢」は弾を打ち

尽くし、米軍機の猛爆撃で大破着

日本内地での唯一の戦闘と 慰問袋で送った絵

私は昭和14年2月11日、旧紀元節に広島県で生まれた。紀元節とは今の建国記念日である。幼児期を戦争の真ただ中で過ごし、昭和20年に国民学校（初等科6年、高等科2年）へ入学したが、その年の8月に終戦を迎えた。

私の故郷が、

計62回の空襲を受けた海軍鎮守府「呉」に近かったこともあり、そのたびに米艦載戦闘機は登校中の私たち目掛けて機銃掃射した。戦時中は物資不足から、子



母と6歳の昭紀さん

6歳だった幼児の 戦争体験と伝えたいこと

土器町 實近 昭紀さん

わらず、夫人は快く引き受けてくれたという。戦地から復員した父が、「あの夫人も原爆で亡くなっただろう」としみじみ語った。

北支の荒野を父の部隊が行軍中、南下部隊とすれ違った。このとき偶然にも南下部隊に末弟を見つけたが、声を掛ける間もなく両部隊は行き過ぎたという。末弟の部隊は、南方戦線部隊壊滅による補充のための南下であったため、弟も南方で戦死し遺骨はない。

戦争は足るを知らない 人類最大の悪

8月15日の終戦日が近づくと、野坂昭如氏原作のアニメ「火垂るの



昭紀さんの父(昭和20年1月撮影)

墓」がテレビでよく放映される。重巡洋艦「摩耶」の海軍士官だった父を海戦で失い、母を神戸の空襲で亡くし、戦線孤児に

なった幼い兄と妹が短い一生を終える映画である。神戸の国鉄三ノ宮駅構内で野垂れ死にした兄・清太を駅の係員が片付けるシーン。死体確認の係員が、清太の懐から転がったドロップスの缶を草むらへ放り投げると、カラコンロンと転がり蓋が開いて骨片が散らばる。この骨は栄養失調で死んだ妹・節子をだびに付した骨だが、このシーンは何度見ても切ない。対戦国それぞれに開戦する理由があるのだろうか……。

ある野生動物写真家が偶然撮影した感動的なシーンを披露して結びとしたい。アフリカのサバンナでスコールにあつてズブ濡れになったインパラの子が、雨を避けてライオンのいる岩陰に入った。飛んで火にいる夏の虫。ところが満腹だったライオンは、子インパラの濡れた全身をなめて乾かしてやった。なぜ人間は足るを知らないのだろうか。人類の歴史は戦争の歴史という。戦争は足るを知らない人類が起こす最大の悪である。戦争を起こしてはならない。私はこのことを伝えたい。

底した。沈没前、主砲内に残存していた二発の砲弾を処理するため、仰角一杯に上げた主砲からの発射が、くしくも日本海軍連合艦隊最後の主砲発射となった。この戦闘は、係留のため米軍機の爆撃を航送回避できない中で、洋上戦と同じ戦闘が行われた日本内地唯一の戦闘だった。

戦争が終わり、激戦のフィリピンの戦線から復員した兵士が、母に「昭紀さん（私）が描いた慰問袋の絵が、市外戦を制して占領したマニラの街角に貼られていて涙が出た」と話した。遠い異国フィリピンの激戦地マニラの街角に貼られた私の絵が戦いに疲弊した兵士の慰めになったことを思い出す。

父が部隊行軍で偶然すれ違った 末弟との永遠の別れ

父は広島師団で、戦線への編成を受けた。父の一人前までは南方派遣で、父は北支派遣だった。後に戦況悪化で、南方派遣軍は玉碎（全滅）が続き、生死も紙一重だったと復員した父は語っていた。戦線派遣前、母と曾祖父母と

用語の説明

- ◆鎮守府 日本海軍の根拠地として艦隊の後方を統括した機関
- ◆慰問袋 出征軍人などの慰問のために手紙・日用品・娯楽品などを入れた袋
- ◆工廠 旧陸海軍に所属し、兵器・弾薬などの軍需品を製造・修理した工場
- ◆重巡洋艦 強力な攻撃力と高速性能を持つ巡洋艦の中でも大型のもの
- ◆北支 中国北部